
オリジンブラッド・イモータル

絃城恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オリジンブラッド・イモータル

【Nコード】

N9152Y

【作者名】

絃城恭介

【あらすじ】

人間には生まれながらにして前世の記憶が刻まれ続けている。それは言葉であり、経験であり、意味である。それを総称したものを科学者たちは『オリジン起源』と名付けた。

水城緋雨は『ブラッド血』と言う諸刃の剣の起源を覚醒させる。

前ノ蔵眷属は最強の名をひたすらに追い求めてきた。その結果、慢心をし水木緋雨に敗北する。

彼は己の驕りに気が付き、初めからやり直すと決意する。

彼らは何を思い、何をするのか……

絃城恭介作品第二段、オリジンブラッドイモータルよろしく願
いします。

プロローグ（前書き）

プロローグ

一章

1 想いと誓いのカタルシス

2 日常パノイア

3 始まりのゲシュタルト

4 衝動のアスペクト

二章

未定

プロローグ

とある青年の話をしよう。

誰からも認められることが無く、誰かに認められようと血反吐を吐く思いで努力をしてきた青年の物語を。

その青年の望みは切ないものであった。

誰かに認められたい、自分を馬鹿にしてきた者たちに自分の有能さを知ってもらいたい、と、そう願って歩き続けてきた。

誰しもが一度はその苦痛を知り、その境地を乗り越え、手にする事のできるような小さな理想。

だからこそ青年は諦めると言うことだけはしなかった。

諦めると言うことは、自分の今までしてきたことを無に帰す行為だと知っていたから。

例えばそれが誰かの犠牲の上に成り立つ望みであったと悟り……

自分の望みを叶えると言う事がどれほどの死を生み出すかと言うことを理解したとしても……

一度は絶望こそしたが、彼は己の中に眠る起源を覚醒させることに成功させる。

彼の起源は『^{フリッド}血』と言う五大属性に当てはまらない特別なものであった。

起源を覚醒させた彼はとにかく喜んだ。だがしかし、それと同時に喜び以上の絶望を再び味わうこととなった。

何故なら彼の起源である『^{フリッド}血』を使用するたびに、彼の身体は吸血鬼に変わっていくと言う事実を理解してしまったから。

だが、それでも良いのだと彼は自分を偽り納得させた。

他者の血を奪わなければ碌に起源能力を使用することができずとも、生きていく上では特に関係ないと。

しかし、青年は気付くのが遅すぎた。

この都市に入ったと言うことは、

否応無しに戦火の中に放り込まれ、

誰かの命を奪うことになると言うことに。

そんな基本を、今まで覚え続けていることができたのなら、少年は苦しむ必要など無かった。

人間としての生を捨て、本能のままに生き血を啜り、本物の化け物として自身を完成させていたのなら、青年は今までのような人生を送っていただろう。そこには苦痛は無かっただろう。

だが、青年は違った。

誰かの血液を奪うことに罪悪感を感じ、起源オリジン覚醒者に虐げられる起源持ち（マテリアル）に手を差し伸べずにはいられなかった。

誰よりも特別な力を持ち、誰よりも心の優しかった青年は余りにも人間過ぎた。

その優しさのせいで、青年は幾度も絶望を味わった。生死の境界線に幾度と無く立った。

親しい友人が居た、想いを寄せる人が居た。

その者たちの前で能力を使ったびに、青年の周りからは少しずつ人が離れていった。それでも青年は己の生き方を変えることはしなかった。

離れ行くと知っても、助けたい誰かに手を差し伸べ、感謝され、そして畏怖される。いつでも青年は束の間の幸せを手放すことはできなかった。

そして今、青年は最大の決断を迫られている。

常人の視力の外の距離にある場所に、三桁では収まらないほどの人間が建物を警備しているのが見える。

凍えるほどに冷たい夜風は、ビルの屋上に立つ青年の身体を無常

に吹き荒んでいる。

そんな夜の暗闇に包まれた冷たい世界で、青年は葛藤していた。

「これで失敗したら僕は『不^{イモータル}死』の少女を二度と救えない……けど、本当にそれでいいのか、僕は」

たった一度のミスで都市の全てを敵に回すような危険な挑戦。それで得られるものはたった一人の少女の笑顔だけ。

それでも、青年は少女を助けたいと思う理由は二つある。

一つ目は、ついに輸血パックによる血の摂取では肉体を維持させることが不可能になったと言うこと。

二つ目は、過去にたった一度だけ見た少女に「たすけて」と言われたような気がしたから。

「名前も知らない人間に、直接言われたわけでもない言葉のために僕は、全てを敵に回す覚悟はあるのか」

青年の答えは既に決まっていた。

どれだけ自問自答を繰り返したとしても、この問いに対する答えは一つしか持ちえていないのだから。

「は……僕は、過去の僕と決別するんだろ。誰にも認められないことに苦しんでいた僕と」

青年の呆然としていた表情が変わった。

その表情は、葛藤の末に自ら答えを決めたものにしかできないような晴れやかな表情であった。

ただ誰かに認められたいという想いの元に生きてきた青年が、ようやく気が付くことのできた新たな想い。

ゆったりとした動作で青年は輸血パックを胸ポケットから取り出すと、それを一気に飲み干す。

「僕は、この気持ちだけは裏切らない。偽るつもりは無い」

次の瞬間、青年 水城^{みずぎ}緋雨^{ひさめ}は言いよつの無い高揚感に包まれた。

全身を熱く煮えたぎったような血が駆け巡り、心臓がドクンと一つ大きくする。緋雨はこの状態になった血液のことを魔血^{イビルブラッド}と呼ぶ。

文字と呼び名の通り、魔の血。

他者の血を摂取した場合に自然に発動し、使用者である緋雨の身体機能を全体的に上昇させ、人間をはるかに凌駕した身体能力を得ることができる。

つまり、ビルの屋上から飛び降りることくらい緋雨にとっては造作も無いこととなるのだ。

軽く地面を蹴りつけ、隣のビルに跳び、目的の建物に向かって一直線に夜空を駆ける。黒い閃光となった緋雨を常人の視力で捉えることができるはずも無く、三桁を超えるほどの警備員共は何の意味も無く突破された。

建物の中に進入をした緋雨は何の苦も無く『不死』の少女の居る部屋に辿り着けた。

部屋の前に立ち、名も知らない少女を助けに来た緋雨は思った。

（これじゃ、僕が悪役みたいだな……）

そして、扉を開けた彼を待っていたのは『不死』の少女と、素知らぬ表情で待ち構えるように立っていた男が一人。

「よう、オリジンブラッド。常々アンタとは戦ってみたいと思ってたんだよ」

オリジンブラッド。それは水城緋雨に付けられた通り名である。

「僕は出来る事なら戦いたくない……彼女を此方に渡せ」

「おいおい、つれないねえ。俺はアンタの敵で、アンタは俺を倒さないと不死の少女を奪えない。だったら殺りあうしか無いだろ？」

「時間が無い……殺されても文句は言うなよ　なにせ、僕は化け物だからね」

無表情のまま、冗談のような口調で言い終えた緋雨は、ベルトに付けているホルスターからナイフを取り出す。

「オリジンブラッド……俺を馬鹿にしているんじゃないだろうな？」

男の問いに、緋雨は答えることなく……

取り出したナイフで自分の掌を串刺しにした。

「勘違いするなよ起源覚醒者……これが僕の戦い方だ」

流れ出る血液が地面に零れることなく、重力に逆らい刃を形成していく。酸素と結合したことにより真紅の血液はどす黒い赤となり、無骨な石の刃のような形状になった。

しかし、絶えず流れ続ける魔血によって形成された刃は一定間隔で鼓動を刻み、まるで生きているかのような錯覚を覚えさせる。

緋雨はこの魔血で生成した刃を『傷つけるモノ（ラクサーシャ）』と呼ぶ。

「臆したなら恥も外聞も無く逃げる。これを見てもなお、僕と戦うと言っのなら容赦はしない」

怒気も覇気も何も無い、無表情で緋雨は男に告げる。

だが、男には逃げると言う概念が存在しなかった。目の前に存在する緋雨と戦う日を待ち望んでいた男にとって、緋雨の言葉は心を躍らせるだけであつた。

ただ最強の称号を目指してきた男に、恐怖など存在しない。在るものは戦闘に対する高揚感と、勝利をした時に得られる快感のみ。

「ハッ、容赦しないだあ？ 笑わせんなよ、オリジンブラッド。俺はお前に勝つためにここに居る。逃げるって言うのは死ぬことを言うんだよッ！」

だから男は緋雨に向かって自分の全てを見せるつもりであつた。否、見せるはずだつたのだ。

「なら……覚醒者千人を同時に相手取って倒せるくらいに強くなれ」しかし、男に待ち受けていたものは絶望と苦痛であつた。

「な……あ、嘘……だろ　こんなはずじゃ………」

緋雨のラクサーシャによって腹部を突き刺された男は血液を流すことなく倒れ伏せた。

「……世界は『じやなかった』に溢れている。殺すつもりじゃなかった、傷つけるつもりじゃなかった、そんな言葉は嘘だ。全部わかっていてそれを言うんだ。逃げるための口実、僕はそれを自分で

経験してきて知っているよ。そんなものは自分の甘さに過ぎないって」

だから

そう言つて緋雨は言葉を紡ぐ。

「悔しいと思つたのなら諦めるな。何でもいいからその意思を強く持つて」

「それは詭弁だ……オリジンブラッド……俺をここで殺さないとお前はきつと後悔するぞ……俺は、お前を必ず殺す」

そんな事を最後に呟いて男は完全に意識を失つた。緋雨はそれを見届けると、ただそこに座り込んでいる少女に手を差し伸べた。

少女は緋雨から差し伸べられた手を掴むべきか、掴まぬべきかを迷っているのか手を出しては引つ込め、緋雨の顔を見ては俯くと言ふ動作を繰り返している。

緋雨はそれに対して何も言うことなく、ただこの手を握ってくれるときを待ち望む。強制するつもりも無い、緋雨はあのときに聴いた言葉を信じるのみ。

だから、いつまでも待つつもりであつた。

そんな時、少女から問いかけるような言葉が口にされた。

「なづなを助けることに……何の意味があつたの？」

そんな問いかけをされた時、緋雨は迷ふことなく、初めから己の中に存在していた言葉を口にした。

「たすけてつて言われた気がしたから」

緋雨がそう言つと、少女はいつの間にか差し伸べられていたその手を掴んでいた。

緋雨も、掴まれた手を決して離さないように握り返す。

これが『不死』の起源覚醒者である少女と、『血』の起源覚醒者である緋雨の始まりの一步である。

「助けに来てくれてありがとう」

少女は、満面の笑みで緋雨に微笑んだ。

プロローグ（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9152y/>

オリジンブラッド・イモータル

2011年11月27日13時47分発行